陶器師の手で

「エレミヤ書」18 章 1～11 節までを朗読。

6 節「**主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか。イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある**」。

イスラエルの民は父祖アブラハムを神様が選んでくださって、その子孫であるイスラエルの人々、後にイスラエルとユダという二つの国に別れることになりますが、長い年月にわたって、イスラエルの民を神様は格別愛して、神の民として大切にしてくださいました。イスラエルの民も神様が自分たちの神であることを、全てのことの中心に神様が立っていてくださると信じて、生きて来たのです。

この世に生きていますと、神様を私たちは目に見ることができない。また手で触ったり、声を聞いたりすることもできませんから、信じてはいるけれども、どこにいるのか、いつどうなるのやら、何も分からない。ところが、目の前にあるもの、この世の様々なことが見えていますから、ついそちらの方に心が引かれてしまう。神様から離れてしまう。そういうことが度々あります。旧約聖書には、イスラエルの歴史が語られています。これは必ずしもいま私たちが知っているイスラエル国と、ユダヤ人といわれている人々の歴史と、必ずしも重なり合うわけではありません。歴史ではありますが、神様による歴史でありますから、イスラエルという一つの民族を神様が選んで、それを自分の目的のためにイスラエルの民を導かれたのであります。神様のご目的は、イスラエルの人々を通して、神のいますこと、また神の力、神のご愛と栄光、誉れをイスラエルの民を通して証しすることです。しかしイスラエルの民は、調子が良いとき、神様のいますことを信じ、神様に信頼して、その恵みを頂いて大喜びをし、幸いな時代もあり、そういう時を過ごすこともあります。しかし、ともすると心が揺れて、この世に引かれ、他の民族の様々な様子に心を奪われてしまう。その結果、まことの信頼すべき神様を忘れてしまうことが多々あったわけです。

モーセによって奴隷の生涯から救い出されて、カナンの地に移住して行きます。そこに定着し、その後、カナンの地でいろいろな民族と戦い、国が造られていきます。後にサウル王様を初めて国の王としていただいて、ダビデ、ソロモンという名君である王様が、神様の前で主に仕えつつ、民を指導してまいりました。しかし、時が過ぎるにつれて、また国が一つの制度として整ってきます。生活が自分たちの力で何とかやれるようになって、いろいろな問題がなくなったとき、イスラエルの民は神様を離れて行きます。といって、神様を失ったわけではありませんが、その心に人の知恵や力、この世の物に対しての信頼、そういうものを頼り

とする生活に変わってしまう。神様は、そのことを大変残念に思われるのです。何としてもイスラエルの民が立てられた目的にかなうものに造り替えたい。イスラエルの民が神様を畏れ敬って、神と共に生きる、神様の不思議な御業、力を味わい、感謝賛美して、神様をほめたたえる民にしたいと願われたのです。ところが、現実の彼らの生活は、全くそういうものとは違っていました。そのため神様はいろいろな手立てをもって、彼らに警告を与え、その思いを新しくしようとなさったのです。しかし、どうしてもそのことが通じない、分かってもらえない。そのためにとうとうアッシリア、またバビロンという大きな国を興（おこ）して、イスラエルをひとまず滅ぼしてしまう。全部御破算にしようと決められたのです。バビロン帝国が大軍をもって彼らを攻め立て、やがて国が滅びます。神様は、イスラエルの民に「この戦で戦ってはならない。降参して早く捕らえられて、そしてバビロンの地に連れて行かれなさい。そして、そこで家をもち、畑を耕し、子どもたちを育てて、70 年の旅路をそこで過ごせ」と命じられた。「70 年たったら、もう一度この廃虚となったエルサレムを建て直し、神の民をもう一度新しくする」と言われたのです。

ところが、それを信じることをしなかった人たちは、エジプトへ逃げたり、あるいは強力な軍隊であるバビロンの人々と戦って、死んでしまう事態もありました。そうやってバビロンへ連れて行かれるわけですが、イスラエルの民に対して神様は、バビロン帝国を用いて新しい事をしようと決めたとき、その時代の預言者の一人がエレミヤであります。もちろんイザヤもそうでありますが、エレミヤに対して神様は、ご自分の御心を語っておられます。

それが今お読みいたしました、18 章 1 節からの記事であります。神様は、預言者エレミヤに、「陶器師の家に行ってみなさい」と。「陶器師」いわゆる、粘土をこねて、様々な器、生活用具を造る。そういう「陶器師の家へ出掛けて行け」と。「そこでその作業を見なさい」と。彼は神様の言われたとおり、そこへ出掛けて行って、陶器師の仕事ぶりを見ている。ろくろを回しながら粘土で形作っていく。私たちも作陶家の工房を見学したりしますが、見事ですね。長年、熟練した人が造るとき、何一つ測るものがなくても、きちっと一つひとつ同じサイズにそろえて造ることができます。

3 節以下に「**わたしは陶器師の家へ下って行った。見ると彼は、ろくろで仕事をしていたが、4 粘土で造っていた器が、その人の手の中で仕損じたので、彼は自分の意のままに、それをもってほかの器を造った**」と。見ていますと、陶器師が造っている器が仕損じた。自分が予期したものではなかった。「どうするだろうか？」見ていると、やり掛けていたものを全部つぶして、粘土に練り直し、他の器に造り替えてしまった。その一部始終の作業をエレミヤが見ていたわけです。そのときに神様が語られたのが 6 節であ

ります。「**主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか**」。神様がおっしゃったのは、陶器師としての神様が、ご自分の手をもってイスラエルの民をご自分の民として、ご自分の宝の民として選び、長い年月をかけて、様々な問題、悩みの中を通して、共にいてくださった。イスラエルの民をご自分のご目的にかなう器に仕立て上げたいと思われたのです。ところが仕損じてしまった。まさにこの陶器師のやったのと同じであります。神様が造ろうとしたイスラエルの民が、とんでもない形になってしまった。そのときに6節に「**主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか**」。この出来損なった陶器を、陶器師が潰して別の器に仕立て上げるように、イスラエルの民を一旦御破算にして、潰してしまって、どんな形にでも造り替えることができる神様が「わたしが陶器師であるよ」と、ここで宣言しているのです。「**イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある**」。「イスラエルの民よ、あなたがたはわたしの手に握られた粘土である」。陶器師が何か器を造るとき、はっきりとしたご目的があり、その器に対しての期待するところがあるからです。神様は、ご自由に、意のままに、お好きなように造る力があります。神様の手に握られた私たちに、神様は大きな期待をしている。

これはイスラエルに対しての言葉ばかりでなく、実はいま私たちに対しても実はそのように願っているのです。私たちは生まれてからすぐにイエス様の救いにあずかったわけではありません。神様を生まれながらに知っていたわけではありません。この世に命を与えられた私たちは、神なき者として生きてきた、自分の知恵で、自分の力で、自分の業で生きてきた。そういう中から、神様は憐れみをもって、私たちをこの救いへと引き入れてくださいました。救いに至るきっかけは、それぞれ違うことがあるとは思いますが、しかしどれ一つ取って、神様によらないものはありません。神様がご自分のものとして選んでくださって、私たちを通して神様のわざをあらわし、神の栄光を現わそうと願っておられるのです。人生の問題があり、悩みがあり、心配があり、不安があり、苦しいとき、信仰の一つでも持っておけば、人生も潤いができて、生きる上で少しは慰めになるかなと、そういう自分の思いで、信仰の道へと導かれたように思います。多くの場合、信仰はそういう形で始まります。ご利益信仰とよく言われますように、自分の人生の欠けたところ、不足しているところを補ってくれる神の力、あるいは神仏にすがることが、自分の為に役に立つと考える。ところが聖書は、私たちに与えようとする救いは私たちの都合のためではない。神様が私たちを必要としてくださった。それは私たち一人ひとりを様々なところから救い出して、栄光をあらわす神の作品として、多くの人々の見本といいますか、神様を証しするものとして、私たちを用いたいと願われたからです。

そもそも神様は、人をお造りになられたのですが、人が罪を犯し、神様を忘れて、神様から離れてしまった。その結果、本来神のものであり、「創世記」に語られているように、神のかたちに、尊いものとして造られながら、その値打ちを失うといいますか、尊い神様の恵みを捨ててしまった。だから、何とかして、もう一度それを新しく、初めの目的にかなうものと私たちを造り替えたい。そのために神様は、ご自分の尊いひとり子を遣わして、全ての罪を御子イエス様に負わせて、全ての呪いと刑罰を加えてしまった。イエス様は、私たち一人ひとりの罪のために十字架に命を断たれてくださった。ですから、イエス様の罪の赦し、十字架のあがないは、ただ単に一部の人のためではなく、全ての人のためであります。過去、現在、未来、どんな人も、イエス様の救いにあずかる者として、神様はその道を備えてくださったのです。ところが、なかなか人は素直に、神様の許に帰って来ることをしない。私たち僅かな者でありますが、憐れみをもってイエス様の救いへと引き入れてくださった。それは私たちが他の人よりも誰よりも立派だからではない。「コリント人への第一の手紙」にありますように「**無きに等しい者、愚かな者、まことに力のない者、知恵も何もない愚かな者、何一つ取り柄のないような私たちをあえて選んでくださった**」（1：26～）のです。それは何としてもイエス様を通して神様がなしてくださった救いの御業が、全ての人に受け入れられるように、またそのわざを進めてくださる神様の絶大なご愛がどんなものであるかを、証しする者として、私たちを選んでくださった。選ばれたからといって、特権階級かというと、そんな者ではありません。まことに他の人よりも力も知恵もない、取るに足らない、無きに等しい者をあえて選んで、その弱い者を通して神様は力を現わす。私たちを造り替えて、神様のご目的にかなうものにしようと決めてくださった。そのゆえに今こうして選ばれ、召されて、救いにあずかったのです。救いにあずかったから、何もかも万事万端、事がうまく行くかと、そうは行きません。次々と問題、試練といわれるものの中に置かれます。それはまさに神様の私たちを再創造する、造り替える新しいわざであります。なぜならば、イスラエルの民に対して、神様が抱いてくださったように、私たちをイエス様の救いに引き入れてくださって、神の民としてくださいました。「証人として立てる」と、神の証人として、神様の栄光の器として私たちを用いようとしてくださるのですが、しかし、確かにイエス様による救いは完成してはいますが、私たちの側がそれにふさわしいものにまだ到達していない。確かにこの世にあって肉に生きている私たちは、いろいろなものがくっついています。確かにキリストの命によってあがなわれ、神のものとされた私たち、そうでありながらも、しかし、実際に私たちの内なるものはどうか？問われると、 まことに心もとない。私たちの内なるもの、いうならば、心、魂の状態がキリストのものとなっているのかどうか？

「ルカによる福音書」11 章 37 節から 41 節までを朗読。

パリサイ人が「一緒に食事をしましょう」と誘ってくれた。家に入ったわけです。ところが、食前に洗うことをしなかったと非難しました。当時のパリサイ人たちはユダヤ教の律法に基づいて生活していましたから、外から入って来るときは必ず足を洗ったり、手を洗ったり、きよめをします。ところが、イエス様は、弟子たちも一緒だったと思いますが、別にそれをしなかったのです。ところがパリサイ人が「いったい、あなたがたはどうして手を洗わないのか？」不思議に思ったと。長年そういう習慣で育ってきたパリサイ人は「え！」と思ったのです。それに対してイエス様がおっしゃったのが 39 節「**あなたがたパリサイ人は、杯や盆の外側をきよめるが**」、そうやって外なるもの、手を洗ったり、口をすすいだり、あるいは、着る物を整えたり、そういう外側のものをきれいにするが、「**あなたがたの内側は貪欲と邪悪とで満ちている**」と。「その心、内なるものはどうなのか？」。実は神様が最も問うていらっしゃるのはそのことです。生活の外側の状況がどうであるか、そんなことはどちらでも良い。手を洗おうと洗うまいと、そんなことはどうでも良い。そんなことよりも何よりも、あなたの内なるものはどうなのか？40 節に「**愚かな者たちよ、外側を造ったかたは、また内側も造られたではないか**」と。私たちを造られた神様は、その内なるものをも造ってくださって、尊いご自分のかたちにまで似たものとしてくださった。ところが、その内なるものが汚れきって、様々な悪に満ちてしまって、そこに神の姿もかたちも欠けらもなくなっているではないか。これはイエス様が、私たちにも問いかけられる事です。だから、41 節に「**ただ、内側にあるものをきよめなさい**」。私たちの内にあるものを清める。私たちの魂を、心を、思いを、様々な肉にある思いから清められた者となりなさいと。

「マタイによる福音書」23 章 25 節から 28 節までを朗読。

確かにイエス様の救いにあずかって感謝し、祈りを絶やすことなく、聖書を読むことも忠実であり、各集会にも励んで出てくる私たちであります。じゃ、そういう外側が整って、余程立派な人間かというと、神様がご覧になるのは人と違って、「主は心を見られる」。私たちの内側を神様は見ておられる。「私たちの内なるものはどういう心になっているのか？」。妬みや憤りや、あるいは、裁く思いや、自尊心、自負心があり、様々な損得利害、情欲の渦巻く心であるかぎり、私たちはいつまでたっても、神様の証人（あかしびと）としての使命を果たすことができないのです。神様は今もなお焼けるような御思いをもって、何とかして私たちの内なるものを造り替えて、清い者にしたい。

まさに先ほどの……、初めに戻りますが、「エレミヤ書」18 章 6 節に「**主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師**

がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか」。神様は、私たちを救いにあずからせてくださって、なおかつまだまだ未熟な私たち、出来たとは言えない私たちの内なるものをもう一度新しく造り替える。そのために「イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある」。いま私たちは神様の手に握られて、様々なことを通して、内なるものを清くしようと神様は切に願っておられる。だからいろいろな問題が起こるのです。試練といわれる事、あるいは、訓練ともいわれますが、艱難や、悲しいことやつらいこと、うれしいこと、楽しいこと、いろいろありますが、一つひとつの事柄の中で絶えず問われているのは、「あなたの心はどうなのか？」ということです。私たちはいつも人の方に向きます。何か問題に当たると、関わる人であるとか、状況、境遇、事柄のほうに思いを向けます。あの人がもっとこうすれば良かった、主人がもっとこう言っておけば良かった、あんなことを子どもがするからこういう目に遭う、こういう不幸になると、外に向かっていろいろな怒りをぶつけます。憤りを持ちます。そうであるかぎり、先ほどイエス様がおっしゃるように「**外側はきよめていながら、内側は貪欲と様々なあしきことで満ちているではないか。偽善なパリサイ人よ**」と。「イエス様の救いに本当に感謝です、感謝です」と言いながら、その心に様々なあしき思いがあり、許せない思いがあり、激しく人を攻撃する思いがあるとするならば、神様は、それをもう一度造り替えたい。陶器師が仕損なったものを造り替えるように、私たちを何としてでも新しくしたい。「何をもって？」日々の一つひとつの事柄を通してです。様々な問題の中に置かれたとき……、これがいちばんよく分かるのです。普段何も事がなく、物事が順調に、思い通りに進んでいるとき、「自分も立派な人間、仏さんみたいな自分」と思う。ところが、一旦事が起こってご覧なさい。一気に自我が出ます。自分の様々な思いがガーッとほとばしって、人を思いっきり罵（ののし）り、木端み塵（こっぱみじん）にしてしまう。「いや、そんなことをしていません」という顔をしていますが、必ずそうなるのです。いや、そういう中を通ることが私たちにとって、神様がそこに……、恵みの時なのです。私たちはいま一度「自分が本当に神様の前に整えられなければならない点はどこなのだろう？」と、自分のこととして、自分の内側に向かって目を向けていただきたい。「自分の何が問題なのか？ 」

カインとアベルの記事が聖書の初めのほうにあります。アベルは自分の羊の初子（ういご）の中から最良のものをささげる。カインは自分の作物をささげる。神様は、アベルの供え物を喜んで受け入れてくれる。ところが、カインの物は退けられた。そのときカインは心に怒りを覚える。「どうして、私の物が顧みられなかったのか！」。そして、その怒りの矛先はどこに行ったか？ アベルでしょう。アベルをひそかに呼び出して、殺して、土の中に埋めてしまいます。そのいちばんの問題は何であったか？ カインが受け入

れられないという憤りの原因をアベルに持ち込んでいった。

私たちのしていることは、大抵そういうことです。「先生、本当に困った。あんなことになってしまって、どうしてでしょう？」、聞いていると、相手が悪かったり、何かあそこが悪かったり、何かが悪かったり……、「じゃ、あなたは？……」と、「え！私、私は別に……」とこう思っている。常に私たちは絶えず自らが「今、神様が私に対して、私の何を、どのように清めようとしてくださっているのか？」。まず私たちはそこに思いを向けて行く。これが神様がおっしゃる「イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある」。いま私たちは神様の手に握られて、その神様は、私たちを御心にかなう者に造り替えようとしていらっしゃる。

だから、その後にありますように「**わたしが滅ぼすと言った国が、悔い改めているならそれを滅ぼさない。またわたしが『よし』とする国があっても、それが悪を行うならばそれを捨ててしまう**」とおっしゃる。「さぁ、あなたはどうしようとするのか？」と、ここで神様はイスラエルに向かって、問い掛けていらっしゃるのです。ですから 11 節の後半に「**あなたがたはおのおのその悪（ぁ）しき道を離れ、その道と行いを改めなさい**」。一見すると「自分は何も悪しき道はない。あるのはあの人だ、この人だ」と思う。ところが、大切なのは、もう一度、よくよく自らを神様の光に照らして、御言葉の光に照らされて、「自分の思いの隅から隅までどこにも曇りがないのか？」「神様の前に恥ずべきことのない自分であるか？」ということを絶えず自省する。

「ヤコブの手紙」1 章 1 節から 4 節までを朗読。

2 節に「**あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい**」。これは矛盾した言葉ですね。「試練に遭ってどうして喜べる！」と「試練が良いはずがない」。ところが、ここには「喜ばしいこと」と、しかも「非常に喜ばしい」というのです。「こんな話ってあるか」と思いますね。なぜそんなに喜べるか、3 節に「**信仰がためされることによって、忍耐が生み出されるからである**」と。私たちの内なるものを整えることになるからです。4 節に「**なんら欠点のない、完全な、でき上がった人となるように**」、これは外側の人のことではなくて、内なる人が、全てが清められて、そういう人になるように、信仰を働かせ、忍耐力を与えられる絶好の機会。これこそが試練です。だから、いま何か悩みに遭う、不安や心配があるとき、もう一度よくよく考えて、大抵の場合は自分に信仰がないからです。不安になるとか、恐れを感じるとか、それは自分に信仰がないことを認めて、「主よ、信なき我を憐れみ給え」と、イエス様にすがって、自分の信仰をいよいよしっかりと持つための恵みの時なのです。ところが、せっかくそういう恵みに会いながら、ただ苦しいばかり、つらいばかり、泣き言を言

いながら、時が過ぎるのを待っているだけで終わってしまう。これでは神様の恵みを取り逃がしてしまいます。ですから、いろいろなことに遭うとき、いろいろな試練に遭った場合、それを本当に喜ばしいこととして受ける。「さて、私はここでどう神様が取り扱ってくださるだろうか？」「いま私を神様がどのように、また造り替えてくださるのだろうか」。古いものを打ち壊して、また建て直さなければならない。出来損なった部分を、もう一度全部潰して、神様がそれを建ててくださるのです。だから、私たちは常にそこに目を向けて行く。どんどん年を取ってくると、いよいよその試練が激しくなる。なぜならば、もう時がないからです。神様は、私たちの内なるものを清めて、神様の前に恥ずべきものがない者として、神の器として造り上げてくださる。それは私たちが自分で変わるわけではない。そこでへリくだって、試練に遭ったとき、謙遜になって自分をよくよく顧みる。そして自分のどこが改めるべき点なのか、何に自分が執着しているのか、自分が大切に思っているものはいったい何なのか？ということを、もう一度心の中に探っていただきたい。ただ主のみいませり、私の心のどこを探っても、そこに主がおられると、そこまで徹底して、キリストのものとなりきっていきたいと思います。そうなるようにと神様が造り出してくださる。手の中にある粘土であります。だから、神様のなさる手のわざに自分を委ねて、与えられる一つひとつの試練を感謝して、試練の中で、どこをどう神様は造り替えよう、新しくしようとしておられるのか、そこをはっきりと教えられて、変えられて行く。御霊がそこで働いてくださるのです。そのためにイエス様はよみがえってくださった。私たちの清さの標準は、キリストの姿かたちに似る者となることです。そこまで神様は、私たちを追い込んで行かれますから、神様のご期待に応えて、是非私たちも手の中の粘土になりきって、神の作品として造られたいと思う。

「エレミヤ書」18 章 6 節に「**主は仰せられる、イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたがたにできないのだろうか。イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたはわたしの手のうちにある**」。「どうぞ主よ、あなたの御心をなしてください」と、主の手に自分をささげて、いろいろな問題の中に置かれたとき、そこが恵みの所ですから、その時にこそ、主の手に自分をささげて、「ここでどのようにでも、神様、私を変えてください」と、主のなさるわざを待ち望んでいきましょう。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。